

大学・女子大学の 京田辺校地開設25周年を迎えて

1986年、大学・女子大学同時に開設された京田辺キャンパス（当時は田辺キャンパス）が、今年で開校四半世紀の節目の年を迎えました。これを機に今までの歩みを簡単に振り返りながら、京田辺市にある本キャンパスが今後めざす方向性と進展について、京田辺市長を交えて意見を交換しました。

出席者

- 石井 明三氏** (京田辺市長)
松岡 敬 (大学副学長(京田辺校地担当)、
 研究開発推進機構長)
本間 洋一 (女子大学企画部長)
高田 芳樹 (大学京田辺校地総務部長、
 京田辺地域連携推進室長)
水谷 義 (大学理工学部教授)

司会



石井 明三氏
 [いしい あけぞう]
 京田辺市長

学内での長い論議と
 地元への粘り強い説明を経て
 実現した新キャンパス開設

水谷 ●本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。同志社大学と同志社女子大学の京田辺キャンパスが1986年に開設されて、今年はやがて25周年です。その四半世紀の間に社会、大学にも様々な変化がありました。この機会に、京田辺市にある両大学の歩みを簡単に振り返りつつ、今後の展開について大いに話し合っていたideきたく思います。まず86年当時、石井市長は市職員としてキャンパス開設事業に携わっておられたそうですね。25年という節目への思いもひとしおではないでしょうか。

石井 ●当時はまだ京田辺市ではなく、綴喜郡田辺町と呼んでおり、人口は約4万5000人でした。北部では花住坂、松井山手などで住宅開発が進み、ちょうどまちが発展し始めたころでしたが、工業施設や河川、道路などの都市基盤にはまだまだ未整備な部分があった頃です。そこへ同志社の田辺移転という話があっ

た。同志社大学、同志社女子大学、同志社国際高校を合わせると面積的にも相当大きな事業でしたので、私も係長として開発担当をしていた関係で、大変力が入ったことを思い出します。

水谷 ●受け入れにあたって、どんな苦労があったのですか。

石井 ●現在は全国的に大学誘致がまちづくりとして当たり前のようになってきましたが、当時の田辺町としては、まだそういう時代ではなかったですね。未知数の中で大学を迎えるという雰囲気、町民などの間にはまだ不安がありました。学生が田んぼの中に入らないだろうか、とか（笑）。そんな中で田辺町が大学を迎えるということは画期的な出来事だったんですね。

でも私たちにすれば、それでまちの活性化ができるという確信があった。しかも全国的に有名な同志社大学を迎えるというところで個人的にすごく興味も期待もありましたので、私も地元への説明や調整などに奔走しました。ただアクセスとしては近鉄新田辺駅、興戸駅、三山木駅はありましたが、移転予定地に近い駅が

ないという問題もありました。それに田辺町には全部で7地域ありますが、やはり農地が主だったために、水に影響は出ないかという不安を訴える方もおられました。しかし4万5000人のまちに2万人の学生が来てくれるのですから、大学を迎える意義を、それこそ寝る間を惜しんで各方面に説いて回ったものです。同志社とは当初からそういうふうに関わっていましたが、市長になってからももっと熱を入れて大学と連携していきたいと思っています。

水谷 ●当時からのご尽力、ご協力で深く感謝いたします。松岡先生は当時はまだ大学におられなかったんですね。

松岡 ●広島におりました。でも私自身同志社の卒業生でもありますので、実家に

帰ってくる都度、キャンパスが出来上がっていくのを大いに関心をもって見ておりました。国際中・高校がもうスタートしていた時期で、田辺町がどう変わっていくのかと非常に興味深く見ていたものです。

水谷 ●同志社大学にはいつからお勤めですか。

松岡 ●93年からです。翌94年に工学部の統合移転が実施されました。80年代に入ってから移転構想を、退職された先生方にお聞きしたことがあります。非常に苦労されたそうですね。移転決定については、やはり田辺町での受け入れ態勢がすごく大きな山だったのではないのでしょうか。そういった地元の皆様のご尽力を得ることによって、まずスタートできたのだと思います。お陰様で大変立派なキャンパスが出来ました。それと同時に同志社も田辺町で、大学の役割である地域連携、社会貢献を行うことが必要であるろう、そういう態勢づくりもスタートしたのが25年前だった。我々の大学の歴史において、画期的な変化をもたらした年だったと思います。



本間 洋一
【ほんま よういち】
女子大学企画部長

本間●女子大も同志社大学と同じ時期にこちらに移りました。私も90年からこちらに参りましたので開設当時のことは分かりませんが、古くからおられる方などから側聞するところによると、移転には大変な決断を要したようですね。女子大でも学内で再三審議を重ねたと伺っています。

広大な校地だからこそ 整備できた充実した教育環境

水谷●京田辺キャンパス開設にはどのような背景があったのでしょうか。
松岡●多様な背景があったと思います。同志社は、いわゆる「大学バブル」の時代を迎えるちよつと手前に移転をしたん

です。当時は臨時定員増で、学生数がどんどん増えていった時代です。京都市の各大学も社会的な高等教育へのニーズの高まりと大学進学希望者の増加に対応しなければいけない一方で、京都市内では工場等制限法がありましたから、市内でキャンパス規模を拡大することは極めて困難でした。同志社大学でも基本的に今出川ではこれ以上の展開はできないという状況を迎えていた。そこで、当時計画が進行中だった関西化学術研究都市の一角を占める形で、田辺町で1・2年生を迎えていたただこうという整備計画をしたわけです。

水谷●79万平方メートルという、自然環境に恵まれた非常に広大な敷地ですからね。今出川ではとても実現できない大規模な施設もたくさん出来ました。

松岡●そうですね。特にスポーツ施設に関しては、分散していた施設の集約が関係者の念願でした。京田辺では43種目に対応できる35もの施設が完成し、非常に素晴らしい環境を整えることができた。同志社大学の掲げる知育・徳育・体育という教育体制を今後いかにつくり上げて

いくかということについて、教育環境を充実させる非常に大きな機会にもなりました。

水谷●開設当時の課題にはどのようなものがあったのですか。

松岡●当時は神・文・法・経・商・工の6学部時代でしたので、現在の学生数よりはやや少なかつたかもしれません。それでも1・2年生が京田辺に来ること、やはり交通の便や学生の生活環境づくりが大きな課題でした。また学修校地が3年になると今出川キャンパスに移るため、学年進行によっては通学先が変わるといふ問題、これは文系学部で現在もあります。それに地元とのつながりも非常に大きな課題であり、逆にこの課題を克服していただいたまちの皆様のご尽力に感謝しているところです。その基盤があつてこそ開設25年を迎えられたという印象ですね。

本間●女子大でも大いに論議を重ねた結果、教育環境の整備は21世紀の大学にとつても非常に重要だということを教職員が理解しました。新しいビジョンに合った女子大学をつくるということで、教職

員が共通した方向に立ち、女子大の移転が実現したのだと考えています。これだけ広いキャンパスを持てたことは、今日の同志社女子大学にとって非常にプラスになっていることは間違いありません。

水谷●場所もいいですね。
本間●坂を上がりきつたところに立っているというのが、今思うと絶好の場所だったなど。京田辺市を一望できるんですよ。非常に充実した施設を作れましたし、豊かな自然環境が学生に与えるものも非常に大きいと、今になって思います。

京田辺キャンパスで加速する 新学部・学科の開設

水谷●京田辺キャンパスが開設されてから、両大学とも新校地での展開が加速していきますね。

本間●女子大は、86年田辺キャンパス開設と同時に、入学定員400名の短期大学部を設置し、今出川キャンパスにあった学芸学部音楽学科の定員を増やして全年移転させました。その2年後には学芸学部英文学科（現在の表象文化学部英

語英文学科）が移転し、学芸学部は京田辺キャンパスに本拠を置くこととなりました。さらには89年に日本語日本文学科を新設、京田辺に次々と新しい学科が開設されたのです。特に2000年以降、女子大にとっては急速に京田辺キャンパスにおける改革が続いて忙しい時期でした。

水谷●どのような背景があったのですか。
本間●まさに21世紀の女子教育体制を固めていくということで、新しいビジョンのもとに学科増設をしてきたわけです。

社会的なニーズもあつて、2000年に短期大学部を改組して女子大の中に新しい4年制の学部を作ろうということになり、現代社会学部社会システム学科を作りました。2002年には学芸学部情報メディア学科を設置し、さらに2004年には現代社会学部の中に現代こども学科を作りました。そして翌年、薬学部医療薬学科を開設し、2007年には学芸学部国際教養学科を作りました。来年度には薬学研究科医療薬学専攻博士課程（4年制課程）の開設を目指して設置認可申請中です。

石井●京田辺へ移ってから5つもの学科が開設された。ものすごい勢いですね。
本間●京田辺キャンパスがなければできなかったことです。この恵まれた教育環境を本当に有効に使わせていただき、心から感謝しています。女子大には約6500人の学生がいますが、京田辺キャンパスには約4100人が学んでいます。メインのキャンパス、大事なキャンパスになりました。

松岡●同志社大学では、86年の京田辺キャンパス開校時は1・2年次生のみであり、学部の本体は今出川にありました。そういう意味では、工学部が学部・大学院を含めて94年に全面的に統合移転するまでは、京田辺は主体となる学部の実像がないキャンパスだったんです。

水谷●工学部の統合移転によって、京田辺キャンパスにとっては初めて4年間を過ごす学部がスタートしたわけですね。あの移転にはどのような事情があつたのですか。

松岡●非常に大きな問題でした。学生数をカバーする必要もありましたが、やはり時代のニーズに合った学科を作ってい



松岡 敬

【まつおか たかし】
大学副学長(京田辺校地担当)、研究開発推進機構長

かなければならない。女子大の事情とまったく同じです。そこで知識工学科を作り、7学科体制になった。これで工学部の教育研究領域の幅が大きく広がりました。

同時に大学院の充実を図る必要があります。特に博士前期課程の定員数を増やしました。この京田辺キャンパスで大学院教育を充実させることができたことは、非常に大きかったのではないかと思います。その一つとして、学際系の大学院、数理環境科学専攻を98年に作りました。これは学際的なところで大学院の専攻を作ったものです。学際的な専攻を作ったのは工学研究科としては初めてだと思います。その後2004年には環境システム学科と情報システムデザイン学科を

作り、新しい学問領域が展開できる体制を築いていきました。

本間●工学部では途中で定員を削減されましたね。

松岡●2008年に理工学部で改組した時ですね。これはもちろん当時の入試状況等も勘案しましたが、社会から要求されている同志社らしい人材を輩出するために、またレベルをきっちりと維持していく上でも、従来の定員数を堅持するよりも新たな学際を作り、学部入学定員を縮小しても新たな体制で臨むことの方が重要だと考えたからです。この時点で数理システム学科を作り、現在の10学科体制になりました。今後この理工学部がどのように京田辺キャンパスで展開していくか、非常に期待しているところです。

水谷●一方で2000年代に入ると、京田辺キャンパスに新しい学部が次々に開設されていきました。

松岡●2005年に京田辺キャンパスで2つめの学部、文化情報学部が発足しました。これは京田辺にいる我々にとっても長年の夢でした。これを一つのきっかけとして、京田辺校地は理系または文

融合のキャンパスづくりに大きく舵を切っていくことになりました。2008年には八田学長をはじめとした大学執行部の方針に基づいて、生命医科学部とスポーツ健康科学部を開設。翌2009年には文学部心理学科を改組・再編した心理学部が始動し、来年度に完成年度を迎えます。また並行して大学院の設置も進められており、来年はスポーツ健康科学研究科に博士後期課程が開設されます。今年はグローバル・コミュニケーション学部を開設し、25年プラス1年で、京田辺キャンパスは計6学部5研究科を擁する体制となります。これが一つの流れですが、今後は学部・大学院の充実を、どう京田辺キャンパスの活性化につなげていくかを考える必要があると思っています。

キャンパス移転を契機にさらに発展を続ける京田辺市

水谷●京田辺では女子大には薬学部ができて、大学には新しい理系の学部が増えていった25年間でした。石井市長、同志社大学、女子大学が来てからの25年間で、

京田辺市にはどのような変化がありましたか。

石井●まず、人口が著しく伸びました。これは大きかったですね。1995年の国勢調査では5万人を超え、1997年には市制を敷かせていただきました。昨年の国勢調査では約6万8000人になり、現在も年々人口が増えています。京都府全体でも、人口が増加している市町村といえば木津川市と京田辺市です。**高田**●交通の便も非常に良くなりましたね。

石井●京田辺市の面積は43平方キロメートル。その中にJRと近鉄が走り、駅が9つもある。非常に珍しいまちです。ここへ最近、第二京阪道路が整備され、京奈和自動車道もやがて完成します。車な



高田 芳樹

【たかた よしき】
大学京田辺校地総務部長、京田辺地域連携推進室長

ら30〜40分で大阪、京都、奈良へ行ける。JR、近鉄でも同様の時間で都心へ行ける。これは大きな利点です。JRには同志社の協力を得て同志社前駅ができていますし、それに通じるようにJRと近鉄の間に道路を整備しています。JR学研都市線の輸送力増強にも市として取り組み、新田辺駅や三山木駅の土地区画整理事業による基盤整備など、都市基盤を少しずつですが整備してきました。特に三山木駅前には現在270億円を投入し、約36ヘクタールを学研区域の北玄関、京田辺や同志社の南玄関として整備中で、これによって同志社の2万人の学生さんの受け入れにも役立つかと思えます。

このような利便性を生かしながら、市民と学生が共に賑わうまち、学生さんと気持ちの通じるまちづくりをめざしていました。それが実を結んできました。京田辺キャンパス開設当時はまだまだ空き地が目立っていましたが、両大学とも新しい学部の設置が進むとともに、校舎や施設が目に見えて充実してきましたね。学生の皆さんが市内で活動するようになり、市民の方々も学生さんたちを受け入

れるようになってきた。本間に、同志社に来ていただいたことがまちの大きな発展につながりました。

学生・市民に活用されるキャンパスの多様な施設

水谷●確かにここは非常に便利で、学生にも奈良や神戸から来ている者もいます。どこからでもアクセスが良い。そこへ市も手を加えていただいていることに感謝しています。次は京田辺キャンパスのハード面、すなわちキャンパスデザインについてのお話を伺いましょう。まず女子大ではいかがですか。色々な建物が出来ましたね。

本間●最初に移転した音楽学科については頌啓館という建物を建て、その中に小さなコンサートホールを設置しました。音響も非常に良い設備にして十分な練習環境が確保できたという、非常に大きなメリットがありました。88年には学校法人同志社創立111周年を記念して、新島記念講堂が完成しました。現在パイプオルガンが入っており、市民の皆さんに



水谷 義
【みずたに ただし】
大学理工学部教授

演奏会にお越しいただくなどしています。
水谷●高い尖塔は京田辺キャンパスのシンボルですね。

本問●あれが近鉄から見えるものですか、学生たちは記念講堂の尖塔を見ると「京田辺に帰ってきた」というイメージを抱くようです。そして2000年には創立125周年記念事業として友和館を建ててコミュニケーションセンターにすると同時に、事務機構を一括して納めることができました。ちょうど山の傾斜を利用しており、面白い構造になっています。2階から4階にかけて非常に眺めがいい。3階に食堂、4階にはカフェテリアが入り、学生たちはお昼休みにそこへ来て市内の風景を眺めています。1階にはヒバードホールを造り、立派なソファを置いて、

て、学生が安らいだり、互いにコミュニケーションを取ったりする場になっています。あとは正門の位置を変えて野外エスカレーターを付けました。以前は曲がりくねったアスレチックコースのような道でしたが、エスカレーターを付けてから学生たちの評判もなかなか良いようです。キャンパスに入る前のプロムナードでも植栽に気を遣い、かなり凝った計画を立てています。

水谷●2005年の薬学部開設でも、新しい建物が出来ました。

本問●憩水館ですね。教育設備が非常にコンパクトに入りました。生薬学という学問がありますので薬用植物園も造り、約100種類の植物を栽培しています。2010年3月には、以前テニスコートだった場所を公園化して中庭が完成しました。まだ高い木がなくて日がかんかんと当たりますが、いずれはそこが女子大の象徴的な場所になるのではと思います。愛称も学生から募集して、「Vinculum（ウィンクルム）の庭」と決まりました。

石井●どういう意味ですか。
本問●私は知らなかったんですが、ラテ

ン語で「絆」という意味だそうです。キャンパス整備は、これでやっと一段落ついた感じですね。広大な土地と豊かな自然があり、こういった施策ができたのは学生にとっても非常に良かった。今出川とはまた違った雰囲気、若い人たちに来てもらえる新しいキャンパスというイメージが広がっていると思います。高校生の皆さんにもよく見学に来ていただいています。

石井●京田辺キャンパス開設以来、同志社には我々のまちづくりにもご理解をいただいで、校舎には勾配屋根を採用していただいています。独特の煉瓦風建築が自然に溶け込んで美しい景観をつくり、大学がこのまちのシンボルの一つになりました。「同志社の京田辺」ということで、現在も色々アピールさせていただいています。

水谷●京田辺の立地を生かしたキャンパスづくりが大変うまく進んでいるんですね。大学の方はいかがですか。
松岡●一番大きなキャンパスの変化は、工学部の移転です。この時は工学部の建物が4棟出来ました。その中の1棟が非

常に大きく、様々な実験設備のためのスペースを確保できた。これが教育研究の大きな推進力になったと思います。ただ不足していたのは、学生たちが集い自分から勉強していく場。その問題に対し、2003年に同志社ローム記念館が完成しました。ご存じのように、今まで同志社にはなかったような建物です。あの大きな空間の中で学生たちが勉強でき、語らいもできる。その奥には情報メディア館があり、次世代の情報担い手を養成するための教育を充実させる施設になっています。これを受けて2005年に文化情報学部が出来た。このような環境が整い、京田辺キャンパスのハード面では非常に大きなメリットが得られました。

京田辺キャンパスを 学研都市の核としたまちづくり

水谷●関西化学術研究都市、いわゆるけいはんな学研都市に近い立地はどう生かされていますか。

松岡●これも重要なことですね。京田辺キャンパスには理工学部がありますので、

産学連携を強化したいという強い要望が2000年の少し前からあり、大学にリゾンオフィス、研究開発推進機構を設置しました。また2006年には地域連携の強化に向けて、インキュベーション施設Incubation Centerを設けました。企業誘致も含めて大学と企業との連携を深める、あるいは産業に対する社会貢献へと展開できる施設です。これは従来なかった、非常に大きな展開であろうと思いますが、広大で学研都市に近いという地の利を生かした結果だと思っています。今後はOfficeのみならず、さらに多様な事業に向けて、利用できるものはどんどん利用していく。京田辺キャンパスを日本にアピールしていくような研究施設を作っていく、その基盤づくりを行う必要があるでしょう。けいはんな地区との連携については同地区との協議会があり、大学の教員が関わっている委員会も多数あります。これらのネットワーク、情報網も生かしているのかなありません。

松岡●キャンパスとしては少し離れていますが、基本的には京田辺校地というエリアの中で、特に国際化推進の上で非常に大きな役割を果たしていく施設ではないかと思っています。これらハード面での充実、6学部体制になったことと合わせて京田辺キャンパスの大きな変化となりました。
水谷●先ほど石井市長から、三山木を学研都市の玄関として整備中であるというお話が出ました。学研都市という研究環境については市としてどう捉えておられますか。
石井●学研都市では京阪奈丘陵に分散する12のクラスター、クラスターとは「どのような房」という意味ですが、すなわち文化学術研究地区を段階的に整備中です。京田辺市にあるクラスターは3つで面積的にはそれほどありませんが、木津川市や精華町のほかに枚方市や生駒市などにある他のクラスターと近接していますので、各クラスターの研究機関とも連携しやすい立地にあります。学研都市には情報産業、環境・エネルギー、バイオ、ロボット、医療などの分野に重点を置いた

研究機関が数多くあります。それらの研究分野と京田辺キャンパスにある学部とは密接な関係にありますから、研究環境としては素晴らしいのではないのでしょうか。

水谷●学研都市に関連して、京田辺市では同志社をどのように位置づけておられますか。

石井●ここに同志社がある以上、やはり市としては京田辺キャンパスが学研都市の大きな核になってほしい。それだけのネームバリューをもつ大学があり、交通の利便性の高いまちだと自負していますから、自覚をもつてまちづくりをしないといけない。先ほどのロゴも私の部長時代に同志社と連携して実現したものです。市長になってからは、今まで以上に同志社と強く連携したまちづくりをしたいと思います。2013年が一つの大きな節目と考えていますが、先ほどのクラスタを含めた学研都市と同志社、この両者を含めたまちづくりが非常に重要になってくるでしょう。私が市長でいる限りはそういう気持ちでやっています。

水谷●力強いお言葉をありがとうございます。

研究のフィールドとして取り組ませていただいたのが大きなきっかけになったのではないのでしょうか。

最も長く19年間取り組んでいるプログラムが「京たなべ・同志社ヒューマンカレッジ」です。毎年500人くらい参加していただいています。大学の講義を市民の皆様にも聴いていただき、学んでいただく。知的財産の共有を図る非常に良い機会ではないかと思えます。

石井●包括協定を締結して以降、京田辺市にも市民参画課という窓口を設けました。同志社と市の窓口が密に連携し、人と人とのつながりを大事にした包括協定にしたいと考えています。毎年開催している「全国大学まちづくり政策フォーラム」京田辺」の開催、ラーネット記念図書館の地域開放、D&Dでの技術支援などでも、もっと連携していきたいですね。小中学生向けのスポーツ教室や楽器指導、介護予防事業への参加、女子大学薬学部模擬患者への参画などもできると思います。これ以外にも、連携の可能性はもっとあるでしょう。そのためにトップ会談や、副学長、副市長を座長とす

ます。

石井●ただ、それらをつなぐ山手幹線を完成させなければ、これらのクラスタを組んだ意味がないわけですね。私も市長になってから、この道路をつないでほしいと知事に要望し続けています。多様な研究施設を活用するためには一番近い道路が必要であると。早急に実現を願う、最重要課題です。

水谷●山手幹線の整備は学研都市キャンパスへのアクセスにも関係しますね。

石井●2015年度には山手幹線の南進に向けた整備が完了する予定です。これで学研都市キャンパスへのアクセスもいっそう良くなると思います。

地域に根ざし地域に生かされる連携をめざす

水谷●ソフト面ではどうでしょうか。先ほど市長から、市民と学生が共に賑わうまちというお話が出ましたが、その連携をさらに強化、活性化し、よりその特色を濃くしていく必要がありますね。大学の現状はいかがですか。

連携推進協議会もつくっていますので、できるだけ積極的に協議し、実行に移せるような意見・情報交換を今後も活発にできればと思います。

水谷●秋の「同志社京田辺祭」も、年を追うごとに盛り上がってきましたね。

高田●地域の方々とふれあいの場として定着しつつあります。同時開催のスポーツフェスティバルにも多くの参加をいただき、祭ともどもご家族連れで楽しんでいただいています。ちょうどその日に京田辺市の文化祭も行われ、相互に乗り入れる形で秋の大きなイベントになっています。

石井●まずスポーツからの交流を図っていただくのは良いことですね。私もスポーツが好きですし、学生時代はクラブで生きてきた人間ですから。クラブやサークル活動をしておられる学生の皆さんには、これまでもラグビー、サッカー、野球などを中心に、市民向けのスポーツ教室などを開いていただいています。地域のスポーツクラブの先生方にお世話になることもあります。それに、京田辺キャンパスに整備された、43種目に使える

高田●同志社大学が当時の田辺町に受け入れていただいているから25年が経ち、連携はますます進んでいると思います。大学では京田辺地域連携推進室を2005年に設けて、同年に大学、女子大学、国際中高と京田辺市との間で連携協力に関する包括協定を結びました。これは5項目ありまして、1.教育・文化・福祉の向上、スポーツの振興・発展、2.地域産業振興、新産業創出、3.人材育成、4.まちづくり、5.その他となっています。まさに現在、京田辺市との連携がこれらの項目に沿って展開中です。

水谷●具体的にはどんなプログラムがあるのですか。

高田●市とも協力しながらいろんなプログラムを実施していますが、なかでも特徴的なのは、2005年に文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム、通称「現代GP」に採択された「けいはんな知的特区活性化デザインの提案」ですね。この辺から本格的に市と大学との連携が進み出したのではと思います。特にこのプログラムで三山木地区の様々な課題、特に商業活性化について、教育・

数々のスポーツ施設。これらを活用させていただくことが京田辺の活性化にもつながっています。

水谷●「京たなべ・同志社スポーツクラブ」ですね。

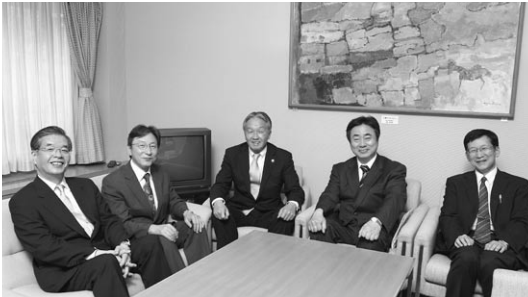
石井●先ほど申し上げたスポーツの他に、アメリカンフットボール、ノルディックウォーク、チアリーディング、アーチェリー、フリークライミングなど、たくさんの種目について、しかもキャンパス内の素晴らしい施設の中で、先生方や学生の皆さんから指導をいただいています。他にも様々な分野で交流の場面をつくり出していきたいですね。そういう連携を一つずつ積み重ねていき、本当に離れられない関係をこれから築いていきたいのです。

高田●我々も今後いつそう「地域に根ざし、地域に生かされる連携」をめざし、今まで以上に市と緊密に情報や意見を交換していきたいと考えています。さらに京田辺市との連携がもちろんメインにはなりますが、近隣の町や市との連携も拡大していく必要があると思いますし、何度も出ていますが学研都市との関係を生

かした連携も必要ですね。

水谷●女子大ではいかがでしょうか。

本間●公開講座や音楽の演奏会、オペラ公演は市民の皆さんにもよくお越しただいています。また、ギャラリー展示なども本学主催でやっています。市民の皆さんがもう少し直接関わってくださるものでは、たとえば音楽学科が2009年から始めているのが、京田辺市の中学校の吹奏楽部の皆さんに来ていただいている楽器の



レッスンの学生と交流し、教えるのと同じ時に一緒に演奏することが、自ずと音楽に対するモチベーションを高めてくれる。

そのような連携を今後とも進めていきたいと思っています。

また現代こども学科では、体験学習の一環として、「こどバ」というプロジェクトを実施しています。「こどバ」とは、明るくはじける、広がりのあるイメージで命名したもので、学生が主体的に企画運営しています。具体的には、京田辺市内の小学生の皆さんをキャンパスに招いて一緒に学ぶ活動で、学内にいくつかの体験ブースを設置し、小学生の皆さんと学生と一緒にそのブースを回ります。ものを作ったり、考えたりという体験を積み重ねながら交流を深めていくのです。過去の実施例では京田辺の特産を扱ったこともあります。地道な活動ではありますが、このようなコミュニティを含めて、私どもも地域連携に参加させていただきたいと思っています。

水谷●そのために市に望まれることは何かありますか。

本間●改めて京田辺市には、市民の皆さんの声を女子大に届けていただくようお願いしたいです。市民の声をよくご存じなのは市役所の皆さんですから。女子大

で取り組めるようなお話がありましたら、ぜひお知らせいただきたい。できるだけ女子大の施設や学生を使っただけ、一緒に楽しくコミュニティづくりをさせていただければと思います。

石井●分かりました。人と人とのつながりを今後も大事にしていきたいと思います。

キャンパス再編に伴う 京田辺校地の取るべき道

水谷●それでは2013年以降の話に移りましょう。同志社大学では京田辺キャンパスで学ぶ文・法・経済・商の計4学部の1・2年次生が、2013年4月、今出川キャンパスに移ります。これらの再編事業の現状をお聞かせください。

松岡●今出川の整備事業については、昨年夏に同志社中学が岩倉に移転しました。移転跡は相国寺、薩摩藩邸跡であるということから発掘作業も行っていました。この調査も終了しました。今出川新棟、烏丸キャンパスともに既に工事に入っており、2012年10月末の完成を予定しています。今まで皆さんがおっしゃられ

たように、この事業は京田辺キャンパス

にとっても非常に大きな、新たな時期を迎える節目であると考えています。ただ、両キャンパスを教育環境という点で見れば、すべての学部教育を4年一貫、1校地で完結させることが可能になる。学部縦割り型となり、教育としては効率の良い進め方ができることになりました。

水谷●13年以降、京田辺キャンパスではどんな中長期プランがあるのですか。

松岡●既に総合企画会議で提案されていますが、まず事務の配置も含めたキャンパス整備をいたします。早ければ2012年の秋頃から一部開始し、約1年かけて13年の夏までに整備したいと考えています。グローバル・コミュニケーション学部ができましたので、国際化を推進していける事務室を含めて、そういった領域をきちんと押さえた事務体制をつくる。キャリア支援ももっと充実させていく必要があると思います。

水谷●今後京田辺では、理工、文化情報、生命医科、スポーツ健康科、心理、グローバル・コミュニケーションの6学部体制で動くこととなります。理系学部中心

のキャンパスになりますね。

松岡●そこで「身体、生命、先端技術、情報」というコンセプトが重要になってきます。今出川のコンセプトは「国際主義、リベラルアーツ」。両キャンパスの特徴を明確にした教育・研究を進め、受験生はもちろん、社会に対しても大学の強みをわかりやすくアピールしていくことが必要だと思います。

水谷●今出川に学生が移るといことは、つまり京田辺市の学生数が減ってしまうですね。

松岡●確かに学生数は約8000人減る見込みです。ただ我々は、学生数の減少がキャンパス衰退につながるとは考えていません。人数が減ることを問題にするのではなく、キャンパスの中身が活性化できるものをつくれるかという問題だと思っています。研究面では広いキャンパスの中で今まで以上に様々な展開ができます。例えば、拠点となるような研究センターを構築していくという方向性も出てくるでしょうし、産学を含めたもっと学際的な環境を展開していけるようなキャンパスづくりも可能と考えています。基本的

願っています。

石井●なるほど。大学の都心回帰は時代の流れでしょうし、京田辺市の学生が減ることは、大学の方針であるとはいえない念なことです。まちづくりへの影響は確かに不安ではありますが、一方でキャン

パス再編後は学部縦割り型になり、京田辺の学部の学生さんは4年間を通じて京田辺に住み、学ぶことになるわけですね。

じつくりと京田辺市の良さを分かっていた。ただける学生生活になることでしょ。松岡先生もおっしゃられたように、学生数減の影響が出るというよりも、いま申し上げたようなことを軸にして、ワンステップ上に行けるまちづくりを今後は考えたいですね。

先ほどグローバル・コミュニケーション学部開設によって国際化を一層進めるといってお話を伺いましたので、そこや他の学部の多くの留学生たちが京田辺キャンパスで学ぶことになる。これによって学生と市民の皆さんとの交流が、ますますグローバルなつながりを築ける可能性がある。市としてもキャンパス再編、新たなまちづくりの方向性を探る転機として捉えたいと思っています。京都の京田辺市から、国際的な京田辺のまちをめざす。そのためには先ほども申し上げたように、同志社を核とした学研区域としたい。これからも同志社とは強く連携していきたいです。

水谷●女子大では13年以降、何か変化は起きますか。

本間●女子大ではひとまず京田辺キャン

も含めた人材育成が重要ではないかと思えます。これがもしかするとクリエイティブ・ヒルの一つのあり方、方向性ではないかと個人的に思っています。

水谷●クリエイティブ・ヒルのいつその展開に向けた目標はありますか。

松岡●今は研究開発推進機構を中心に研究センターが38ありますが、我々の構想では研究センターを3桁にしたい。100をめざしてセンターの設置を進めていきたいと考えています。京田辺は6学部体制となり、その中にも多くの学科ができて、今まで理工学部のみだった学問領域に多様な分野の先生方が集まってきています。増えた学部のぶんだけ、教育研究環境が5倍に広がったということですから、来年は学研都市キャンパスに脳科学研究科も開設されます。しかしながら、先生方個々の高い研究力、教育力を、有効に結集させるシステムが残念ながらまだでき上がっていません。そこで、まずは研究において横の連携を図るシステムをきちっと構築し、世界的な研究拠点をつくり上げていく。それによって世界へ発信していける産学連携の拠点になり得るの

パスの整備計画はほぼ達成できました。特にハード面はかなり実現したのでないでしょうか。あとはソフト面、それからできるだけ京田辺市と地域連携できるようなあり方を模索したいと思います。現代こども学科では、来年度に向けて、保育士資格の取得が可能となるよう、現在、保育士養成施設への指定を申請中です。地域の保育の先生方と交流し、新しい保育や幼児教育のあり方を学び、現場の先生方の意見にふれるなどの機会をもたせていただきたい。地域と一体となって新しい風を吹かせるような子ども教育を行っていただければと考えています。そういう意味でも、ぜひ市の方でも私どもにボールを投げてくださいたいと期待しています。

京田辺を先端研究拠点「クリエイティブ・ヒル」に

松岡●同志社大学としてはこの京田辺キャンパスに「クリエイティブ・ヒル」と

ではないかと思えます。

水谷●それも京田辺キャンパスだからこそスタートしやすいいことですね。

松岡●そう思います。それからキャンパス環境という点から見ると、いま自然災害等で色々なエネルギー問題が起きていますね。我々も無視できない問題です。

そこで、いわゆる「エコキャンパス」「グリーンキャンパス」という構想をキャンパス構想の中に大きく打ち立て、今後の整備事業では「エコ」を一つのキーワードにしようと考えています。例えば生ゴミをどう再利用するか。あるいは太陽光を使った発電システムでエネルギーをできるだけ学内で生産、消費するようなシステムを作っていく。一部では既に教室棟を含めて太陽光発電を導入することができました。今後このような省エネ化、グリーンキャンパス化を質・量ともに拡大し、京田辺キャンパスの特長として位置づけていくつもりです。そのために、いろんなアイデアを先生方、教職員、あるいは地域の皆様から提案いただき、できるだけ実現させたい。それが将来を見据えた京田辺キャンパスの方向性ではな

いうコンセプトを掲げています。「生命・先端技術・情報」というキーワードを盛り込みながら、先端研究拠点をまずまず推進する。ただ、世界の京田辺になるためには、我々同志社が引っ張っていかないとけない。同志社自身がそうあるべきだと思わせるような、世界が注目してくれるようなキャンパスとは何かを模索する必要があるでしょう。

水谷●例えば京田辺キャンパスの強みとは何でしょうか。

松岡●やはり企業との連携。これは非常に重要です。一つの流れとしては一番スムーズに動かしやすいですし、世界の企業も含めて注目してもらいやすく、スタートしやすいのではと私は考えています。具体的には、このキャンパスで物づくりをすることより、我々は人材を育成し輩出していくことに重点を置きたい。あくまでも日本の方々が入学し、学び、世界へ巣立っていく。もちろん逆に、世界からこのキャンパスへ来ていただき、京田辺市で生活し、日本の文化あるいは日本社会の知識を得て、世界の産業界で活躍していただく。このような地域との連携

京田辺キャンパスの国際化今出川キャンパスとの一体化が課題

いかと考えます。

水谷●学生数は減るが、内容を充実していき、世界から人が集まるような中身の濃い京田辺の同志社をめざしていく。それとエコキャンパス構想を持たれているということですね。では改めて今後に向けての課題点を、対策・解決策を含めてお聞きしましょう。

松岡●13年を境に2つのそれぞれのキャンパスで学部が縦割り型になるわけですが、両キャンパスがどのように融合していきけるかがポイントですね。キャンパスごとに分割されるような状況は絶対に避けたいというのが、まず大きな前提です。一つは教育を両キャンパスでどのように展開できるのか、もう一つは課外活動を含めたスポーツ施設をいかに有効利用していくのが、大きな課題です。もちろん学部間、研究科同士の教育あるいは共同研究をどう進めていくのかという

次のステップが出てきますが、まず我々としては早期に方向性を示さないといけない。そして同志社は「出川の同志社」ではなく、京田辺と両方のキャンパスがあつての同志社であるというコンセプトに、塗り替えていく必要があります。ハード面では無料シャトルバスを運行する話が既に学長から出ていますが、学内で議論をしていただいていますので、これらの意見を集約することで今後の具体策が出てくると思います。

本間●女子大も松岡先生がおっしゃったのと同様です。今出川と京田辺キャンパスとに分かれていますので、それをいかに結びつけて、別々のキャンパスという意識がないようにするか。そのために近年やっているのが新入生歓迎会です。両キャンパスの新生1500人を集めて、京田辺の体育館で開催しています。クラブ活動の成果を披露して歓迎したり、カレッジソングの練習をしたりしますが、そういうことよりもむしろ一緒に京田辺に集まり、お互いにコミュニケーションを取ってもらうことが目的ですので、ちよつとしたティーパーティー形式にして

います。学生には好評ですね。教職員も間に入つて話ができ、学内を案内することもある。こういったイベントなどによつて、2つのキャンパスがあるけれども1つなんだという一体感をつくるようにしています。

水谷●科目によつては今出川の学生が京田辺に来ることはあるんですか。

本間●はい。科目によつては結構こちらに来ています。しかし京田辺の方が拠点なので、今出川から京田辺に来るパターンの方が多いですね。そして京田辺キャンパスにいる者も、その中に閉じこもっているつもりはない。できるだけ京田辺キャンパスを強調しながら一体化を図るように取り組んでいます。

水谷●クラブ活動などの行き来はいかがですか。

本間●それはなかなか難しいです。同志社大学のようにシャトルバスで行き来できればいいんですが、我々は経済的にそこまではできません。その辺が女子大として考えていかねばと思つているところです。とはいえ、学生の満足度は高いです。その満足度を落とさないよう、でき

るだけ快適な空間を創出していく。そのためには京田辺が大きな核になるだろうと思つています。

水谷●両キャンパスの一体感の創出のために、女子大では打開策を考えておられるということですね。同志社大学の方はいかがでしょうか。

高田●2013年度以降を見据えた課題は、大きく分けて2つあります。1つは京田辺キャンパスの活性化。現在学生が1万5000人ほどいて、かなり賑わっていますが、文系の1・2年次生の移転によつて、せつかく活性化してきた京田辺キャンパスがまた少し寂しくなるのではという点が心配です。以前から授業が終わると閑散としていた時代が長く続いていましたが、最近は多くの学部が京田辺に本拠を構えるようになり、そういう状態は多少ましになりました。しかし今後は、今まで以上にソフト面での仕掛けを作り、学生の活動を後押しして、キャンパスの活性化を大学としてもバックアップしていくことが大きな課題だと思つています。

2つめは、まさしく両校地の一体化、

一体感の創出です。今までの1・2年生がこちらに来ていた横割り型が完全に縦割り型になり、質的に大きく変化しますから。正課科目の履修やクラブ・サークル活動のための両校地間の往来など、学生の活動に支障が出ないよう、現在いろんな支援策を考えています。ただ女子大よりはもつと人数が多いので、一堂に集まつて何かをするのは難しい。京田辺キャンパスの特徴は持ちながら、両校地の一体感をいかに醸成するかが大事です。

水谷●ただ、今出川と京田辺それぞれで4年間を過ごした場合、学生の中に何か違いは出てきそうでしょうか。特に理工系だと大学院まで行くケースも少なくありません。すると6年間ずつと京田辺にいる学生もいますね。

高田●京田辺で4年間学ぶ学生の中に、同志社の原点である「良心」、同志社人としてのアイデンティティをいかに育み、浸透、定着させていくかは大きな課題です。25年経つたといつても京田辺はまだまだ新しいキャンパスです。今出川には136年という歴史と伝統がありますから、自然と学生の中に、同志社人として

の気持ちも育つと思います。一方で京田辺は広大なキャンパスではありますが、歴史的な雰囲気がありません。新たな伝統をつくっていく必要もあるでしょうが、大学としては両校地共通のアイデンティティ、DNAをもつ卒業生を送り出したい。その辺は今後もつと模索していかねばと思います。そのためには教職員も、良心教育や同志社精神を改めて再認識していく必要があるでしょう。

もう一つ、先ほど松岡副学長からも出ましたように、多々羅キャンパスの活用をもつと進めたい。留学生寮としてさらに積極的に使つていくのはもちろん、京田辺キャンパスの国際化の拠点とするための仕組みを今後は考えていかねばなりません。京田辺市民の皆さんに国際交流の場としてご活用いただくことも前提になつていきますので、これも市とお話ししながら進めていきたいと思つています。

水谷●活性化、一体化、国際化というキーワードが出ました。京田辺市としてはどのようにアプローチしていけますか。**石井**●あまり大きなことは言えませんが、2013年は京田辺市としても一つの

きな転換期になります。そして今度は京田辺キャンパスが6学部体制になり、ここで4年間学び、生活していただける学生さんがもつと出てくる。市にとつても私にとつても大変嬉しいことです。私としては学生の皆さんに京田辺で育つたという実感をもつていただき、ここを「第二のふるさと」と言つてくれるようなまちづくりをめざします。

今後私の信条「人と人とのつながり」を軸にして、同志社と連携していきたい。国際化の一環としてグローバル・コミュニケーション学部を作つていただいたことによつても、国際化を通じて人と人とのつながりがさらに広がり、深まるものと期待しています。また、そういう同志社を学研都市などと合わせて、知的資源として私たちは考えています。それをまちづくりに生かせるような環境整備について、これから市では、市民も市職員も含めて立ち向かつていく必要があるでしょう。皆がそういう前向きな気持ちを出していくことはお互いにとつてプラスになると思っていますし、できるだけそういう交流や協議の機会を積み重ねていくこと

が必要条件の一つと考えています。

水谷●多々羅キャンパスにはどのような期待をしておられますか。

石井●教育・研究目的の施設ですので、ある程度の制約はあろうかと思いますが、可能な範囲で市民開放にご配慮いただければと思います。市民の皆さんと学生さん、あるいは留学生たちとの一つの交流の場、気軽な国際交流拠点になることを期待しています。そのためには市としても、運営面での支援が必要ではないかと考えているところです。

さらに特色ある地域連携を行い 京田辺市と共に歩む

水谷●それでは最後に、これからの京田辺キャンパスへの思いや希望を語っていただきましょう。まず、まちづくりをしておられる市長からお願いします。

石井●包括協定を締結してから、現代GPの中で、地域活動を通じて問題解決能力を磨く取り組みが進められてきました。これが契機となって同志社と地域との連携が深まるようになったと思います。

「地域の輝きと活力の創造」「しあわせを実感できる社会の創造」「京田辺の未来をささえる人づくり」の5つです。職員一同頑張ってます。安全・安心ということについては、今年5月に京田辺市犯罪被害者等支援について、条例化に向けた検討会議を設置しています。包括協定に基づいて先生方にもお知恵をいただきながら、学生の皆さんが安心して生活できる環境をつくっていききたいと思っておりますので、ご協力の程よろしくお願います。

本間●女子大でも薬学部などの学生は結構遅くまでいるんです。やはり駅までの間、安心して安全な空間が欲しいと常々思っています。薬学部は800人在学しておりますから。

松岡●2年で去っていくのと、4年あるいは6年京田辺で暮らすのでは、深みが全然違うんですよ。人生の非常に貴重な4年間を過ごすというのは、社会人になつてから思い出の深みが違う。学生時代の思い出は、まさに凝縮されているんです。そこを京田辺市と大学とでつくり上げていければ。

現代GPの中の学際科目やプロジェクト科目などで、京田辺を題材とした取り組みも数多く設けられました。こうした科目がたくさんあれば、学生の皆さんが京田辺に関心を寄せるきっかけになるでしょう。

同志社大学とはクラブ・サークル活動、女子大とは医学・教育・保育という多様な分野において交流できますから、できるだけ市民もそれを活用しながら学生さんたちとコミュニケーションを取り、何らかの形で同志社との絆を今まで以上に強めていけるでしょう。また、同志社からもそういう場をぜひ提供していただきたいですね。まだまだ眠っている連携の素材はたくさんあるのではないのでしょうか。それを掘り起こすために、学生の皆さんはもとより、職員の皆さん、先生方にもご協力いただければ嬉しいですよ。

今までの25年間は、これからやっていくにあたっての基礎、地盤を築く年月でした。それを揺るがぬ地盤として次のステップにするために、市でも協力は惜しみませんし、市民や職員がその方向に向かってやっていきたいと思います。ま

本間●少しずつ変わってきていると思いますよ。20年前に比べると学生が立ち寄る場所も随分増えてきました。

石井●時代、時代によって若干違います。できるだけ学生さんが過ごしやすい居場所づくりを心がけていきます。勉強も大事ですが、学生さんが将来に生かせるような人間関係を、いろんな場所ですくってもらえれば嬉しいですね。

水谷●他大学との、いろんなレベルでの交流もできればと思います。

高田●私の場合は主に地域連携というスタンスで発言させていただきましたが、さらに特色のある地域連携を考えていきたいですね。どこの大学と地域でも同じような連携は行っています。同志社と京田辺市は、もつと特色ある地域連携を模索していく必要があるのかなと。それから先ほどらい市長もおっしゃっているように、教員、学生、施設といった大学の資源を地域に還元してお役に立てていた、同時に、地域の方でも教育研究のフィールドや学生のボランティアの場等を提供していただければありがたいです。大学と地域は「永遠の隣人」なのです。

た、お互いにいろんなことも言い合えるようになるでしょう。私自身が同志社の学生さんとお話しする機会もあります。私も同志社を信頼して、先頭に立つてまちづくりをしていきます。

松岡●市長が学生と話してくださるのは非常にありがたいです。そういう機会は非常に重要です。市は我々に期待していることを知り、また我々の希望を知っていたら、機会にもなりますから。新たな将来構想がそこから生まれるかもしれません。

石井●学生さんたちとは自然体で話せばと思っています。やはりコミュニケーションが一番大事ですね。

松岡●それに尽きます。

水谷●市長が今年度の市政運営について打ち出された5つの基本プランがありますね。これは学生がここで生活する上で非常に重要なことですので、ぜひ実践していただきたいと思えます。

石井●はい。5つのチャレンジプランというところで書かせていただきました。「安全・安心な暮らしの創造」を最重要課題とする、「つながりによる地域力の創造」ら、互いに支え合い、共存共栄、相互貢献することが今後の地域連携のあり方かなと思います。最後にもう一つ、ここは大都会のキャンパスとは違いますから、文字通り垣根を取払った、市民と一体化した開放的なキャンパスづくりを我々もこれからめざしていくべきだと思っております。

石井●今日このような場を設けていただいたことは私にとって最大の喜びです、さらなる連携に向けて心強く思います。大学と連携しているまちは日本では京田辺だと言われるよう、同志社と京田辺市との絆を一層強めながらまちづくりに邁進していきたい。今後とも積極的に同志社と意見交換ができることを祈って、改めてお礼申し上げます。

水谷●本日は皆さん、どうもありがとうございます。

(2011年6月22日京田辺キャンパス・副業館学長室)